

二〇一八年度

二月二日午前入試(第三回)

# 国語 (45分)

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答用紙の解答らんには、はっきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、3-1 から 3-10 まであります。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昔々、家も家族もなく、一人ぼっちで、美しい心を持った絵描きがいました。あるとき、この国の王さまが、絵画の展覧会を開き、どの絵がもっともすぐれているか決めたいというおふれを出しました。

「描いてみようか。私の絵を、国中の人が見て、美しいと感じてくれるかもしれない。」

そう思うと、描けることへの喜びで、いてもたってもいられず、早速、絵描きも描きはじめました。いろいろと題材を考えて、筆をとりました。しかしなぜか、どれを描いてもパツとしません。

「おかしいな。ふだんは自然と手が動き、色を思いつき、広がりが生まれて、全体がすっかりとしてくるもののだが。あまりきばってしまつと、かえつてうまくいかないようだ。」

やがて、西の空が、ほんのりとしたピンク色になると、低いところに、寶石のような宵の明星が、キラツ。また夜がやってきます。① 絵描きは草の上に寝転んで、空を見、はたと思いつきました。

「そうだ、あの門だ。あの門の絵を描こう。ここに、こうして寝転んで、夢のなかで見た、あの不思議な門。あれは本当に美しかった。私のこの手で描いてみたい。」

夜の明けるのを待たずに、小さなランプの灯り一つを頼りに、絵描きは再び描きはじめました。夢中になつて描きはじめると、彼はもはや王さまや人々が、どう思おうと構わない、という気持ちになつてきました。美しい、立派なあゝの門さえ皆に見てもらえれば、何もいらな思いました。

お触れを出した王さまは、国中から募つた絵を楽しみに待つていました。王さまは、気持ちの広いお人柄で、たくさん集められた絵のために、お城からそう遠くない場所に展覧会場をお作りになり、国の皆が絵を見て、楽しめるようにと② (考えました)。

けれども、王女さまと大臣たちは、

「絵など、いまさら何だというの。他国にいる名画家たちから、できあがつたものを買つたほうが、よっぽどいいのに。」

「へたに皆から募ると、数が増えて大変なことになる。王さまには内緒で、一人ずつからお金をとることにしよう。」

「身の程知らずが、Aと出品してきたら、追つ払つてやるぞ。」

などと、勝手に決めてしまいました。

そして、会場の入り口で、出品する絵ではなく、人を品定めして、お許しを出したのです。

いつしか、展覧会場の前に集つた人々は、

「やれやれ、やっぱりお金持ちしか、出せないのさ。」

「なんでも、王女さまが贅沢な方なので、こんな展覧会はおイヤなのだそうだ。」

④「どうせ、お城にたくさんのお贈り物をしている者が、一等をとるのだろうよ。」

と、声をひそめて話しました。

あと五日ほどで、人々からの出品もすべて終わる、というときになつて、絵描きの大門の絵ができあがりました。門の絵には、絵描きの力強い情熱が込められています。そのせいか、全体が輝いて見えます。

「さあ、私のすべての力を集めて描いたぞ。」

大切に包んで、会場の入り口へ。と、

「おい、どこへ行くのだ。」

「はい、出品に来たのですが。」

「出品だと？ お前のような汚い身なりの者が、一体何を出すというのだ。」

「王さまや、王女さまがお前を見たら、汚くって身震いなさるとよ。」

「帰れ！ 早々に立ち去れ！」

「でも、私はこの日のために、心をこめて描いたのです。どうかお目を通すだけでも。」

「しつこいヤツだな。おい、門番たち。この汚い男を放りだしてしまえ！」

門番は、絵描きの絵に手を伸ばし、取りあげて、

「ふん、こんな絵で出品しようだなんて、身の程知らずめ！」

地面に叩きつけ、踏みつけました。

「ああ！ 私の……私の絵が！」

駆け寄り、絵描きを、さらに突き飛ばす門番たち。かわいそうに、絵描きは、たくさんの人々の見ている前で、さんざんになじられ、外に引きずりだされてしまいました。

もみあっているうちに、立派に描けたはずの絵も、大切な絵の道具も、踏み荒らされ、めちゃくちゃです。

やつのことで、草原へと辿りつきました。絵描きの目から、涙がこぼれました。悲しい涙です。けれど、彼の頬を伝う涙は、キラキラ光って、とても綺麗に見えました。

（小さなころから、たった一人ぼっちで、絵だけが私のすべてだった。寂しいときも、辛いときも、描くことで乗り越えて、今日までがんばってきたけれど、人さまには、わかってはもらえないのだ。）

今日も一日が終わろうとしています。ピンクから濃い赤に変わり、そして群青へと、次から次へと空の色は変化して、また夜がやってきます。

寂しい夜です。いままでは希望に満ちていた絵描きの心を映したかのように、生き生きと夜風が吹いていたものでした。楽しく、そよそよと、音楽のように吹いていたのが、いまはシンとして、花も草も目を閉じています。

絵描きの涙だけが、キラキラと光って、それがまるで星のように見えました。ひとしきり彼は泣いていますが、やがて顔をあげ、涙を拭きました。

（いつまでも、こうしていても仕方がないよ。いまは何だか心のなかに穴があいてしまったかのような気分だけれど、私には、やっぱり絵しかないのだ。周りにどう思われたって、描いていかなければ。展覧会が何だというのだ。何があっても、神さまはきつと見ていてくださるさ。）

思いなおして、元気を出そうと立ちあがった、そのときです。

後ろに何か物の気配を感じました。振り向くと、

「やっつ!？」

あの大門がそびえたっているのです。

暗闇のなかに、黒々と、まさしくあの門が。

「これはどうしたことだ。私の門だ。私の描いた、あの門じゃないか！」

絵描きは、 が抜けそうになりましたが、思わずそばに近づいてみました。

それは、本当に立派な門でした。柱も、屋根も、飾りも、すべて手作りのようで、重々しく、絵描きが思い描いたとおりです。

「なぜ、ここに急に、現れたのだろうか？」

そう思ったとき、かすかな声を耳にしました。声は、とてもか細くて、弱々しく、泣いているようです。どこから聞こえるのか、辿ってみると、門の向こう側ようです。

よくよく見ると、門のアーチのなかから、ほのかな明かりがもれています。絵描きは、なかに入ってみることにしました。門のなかは、とても不思議な世界でした。

黒い、ザラザラの砂が一面にまかれていて、焦げたにおいがします。そのなかで、針金みたいな人影が、何人かしゃがみこんで、泣いていました。

「あーん、あーん。」

⑨皆、泣いています。とても細い人たちですが、よく見ると、薄いベールをまとうつていて、まるで妖精のようです。

「どうしたのです、何をそんなに悲しんでいるのですか？」

声をかけると、皆驚いた様子でしたが、一人が答えました。

「星ですよ。最後の星が、落ちそうなのです。」

「ここはもともと、暗闇の未来。明かりというものが無いのです。」

「あるのは、『希望の粉』という小さな石だけ。この黒い地面に、よく見ると紛れて、落ちていっています。」

「一つの星も出ないので、自分たちで粉を使って星を作り、つるして暮らしていたのです。いつの日か、明かりで満たされる世界になるようにと。でも、順番に落ちはじめました。」

「落ちてしまった星は、黒焦げで、もう使えません。少しでも地面につくと、たちまち炭のように焦げてしまふのです。」

「なるほど。焦げたにおいは、そのせいかな。」

よくよく見ると、黒い砂地には、落ちた黒い星がたくさんつきささっています。見上げれば、一つだけ、空の低いところに、オレンジに鈍く光る星が。

最後に残った、たった一つのこの星も、頼りなげに瞬いて、いまにも力尽き、地面へと落下しそうです。

「希望の粉がたくさんあれば、世界は明るくなるのでしょうか。その粉は、何で作るんですか？」

「人間の心です。」

⑩細い人たちのなかの、一番長身の人が、厳かに答えました。

「希望の粉——。美しい、人々の心からとれる、この粉。前はたくさんあったのです。」

「なのに、いまの人間は、自分をごまかして、本気で怒ったり、泣いたり、おなかの底から笑ったりしなくなつた。」

「心を持たない人、夢を見ることをやめた人、そんな人が増えて、希望の粉は減り、私たちの世界も、輝かなくなつてしまったのです。」

⑪「輝きを失った星は、次々と落ちていくのです。まるで人間の心が沈んでいくように。」

「何とか助かる方法はないのですか？」

絵描きの問いかけに、細い人たちは、小さな声で答えました。

「また人間たちが、夢を見てくれたら。やさしい心を持つてくれれば……そうすれば、星はまた光を取り戻し、瞬きは始めるでしょう。……あなたには、夢はないのですか。」

皆の問いかけに、少し考えて絵描きが言いました。

「あります。画家になりたいという夢が。でもいまは、少しだけ弱い気持ちになつてしまつて。もしかしたら、夢は夢で終わってしまうかもしれない。」

細い人たち全員が、悲しそうな顔をしました。

「あなたも、夢をあきらめてしまうのですか？ あなたまであきらめてしまつたら、もうあの星は、落

ちてしまいわ。最後の星が落ちてしまったら、ここは真の闇の世界。私たちも生きてはいられない。皆、もうすでにやせ細ってしまったって、星を受けとめる力すらなくなっているのです。」

人々が、ほう——つと、大きなため息をついた、とそのとき、

ピシッ、ピシピシッ。

最後の星にひびが入って、

「あっ！ 星が落ちてしまう!!」

ピシューン。

「ああ、もうおしまいだ——。」

凄<sup>まじ</sup>いスピードで落ちてきた星。

見ていた絵描<sup>えが</sup>きは、とっさに、被<sup>かぶ</sup>っていた帽子<sup>ぼうし</sup>を持って、走って、走って、走って、そして——

ドサーン。

すべりこんで、受けとめたのです。

しばらく、じっとしている絵描<sup>えが</sup>きの周りに、皆は心配そうに集まってきました。

絵描<sup>えが</sup>きの帽子<sup>ぼうし</sup>のなかに、光こそいつそう弱くなりましたが、それでもちゃんと、最後の星が輝<sup>かが</sup>いています。

「ほら、あきらめちゃいけない。ちゃんと拾いましたよ。」

絵描<sup>えが</sup>きは、起きあがって言いました。

人々は、こっくりと頷<sup>うなず</sup>いて、

「よかった。本当によかったね。」

「ありがとうございます。あなたのおかげで何だか元気が出てきました。この世界を、希望の未来に作りかえていけそうです。」

帽子<sup>ぼうし</sup>のなかの、小さな星。じっと見つめていると、じんわりと光が広がって、絵描<sup>えが</sup>きの気持ちもあたためられます。

「どんなに深い闇のなかでも、あなた方は希望の石を見つけたではないですか。今度は、これを削<sup>けず</sup>って、たくさん星を増やしてください。ところで皆さんは、なぜあの門から外の真の世界に出ないのです?」

絵描<sup>えが</sup>きは訊<sup>き</sup>ねました。

すると、急に人々の声が小さく、か細くなりました。皆が顔を見合わせ、ささやくように言いました。

⑬ 「外の世界の人は、皆そう言います。そうして、外側は真実、美しい空気に包まれていると思っています。けれども本当は、いろいろな人がいて、汚<sup>よご</sup>れたものだって、良くないことだってたくさんあるのです。私たちは、たとえ明かりが乏<sup>とほ</sup>しくても、ここで、こうしてやっていきたいのです。あなたが与<sup>あた</sup>えてくださった『最後の星』は、私たちの希望の星であり、そしてまた、あなたの心の希望の星でもあるのです。」

そこまで聞こえたと思ったら、暗闇の、さらに奥<sup>おく</sup>から風が吹<sup>ふ</sup>いてきました。

「さあ、どうぞ、この風とともに、門の外へ向かって歩いてください。しっかりと、前を見て、一歩ずつ。」

風はまるで絵描<sup>えが</sup>きを押し<sup>お</sup>しだすかのように、後ろから強く吹ききました。門を通り抜<sup>ぬ</sup>けるときに、パラパラ

ラ——

何枚かの美しいタイルが、はがれおちました。それらは、門の外側にたくさんちらばって、キラキラと光り輝<sup>かが</sup>きました。

振り返ると、暗闇のなかの人影<sup>ひとかげ</sup>は、小さく、薄<sup>うす</sup>くなっていました。けれど、彼<sup>かれ</sup>らに渡<sup>わた</sup>した絵描<sup>えが</sup>きの帽子<sup>ぼうし</sup>のなかの、最後の星は、あたたかなオレンジ色に、いつまでも光って見えました。

気がつくくと、夜が明けた草原で、座りこんでいたのです。

絵描きは、まだ朝もやのけむる、いつものこの場所で、いましがたまで起こっていた出来事を、一つひとつ思い返しました。

後ろを振り返っても、門はありません。細い人たちもいません。

元の草原のまま。朝になっただけ。

「夢だったのか。希望の粉で作られた、希望の星。やはり、描くことを続けられることこそが、私にとっての希望ある人生なのだ。」

立ちあがって、伸びをして、何気なく周りを見ると——なんと、草原のあちこち、いたるところに、門かはがれたタイル、いいえ、金貨がちらばっています。そればかりではありません。

めちやくちやになっていたはずの、あの絵は、いつそう立派になって、絵描きの足元にたてかけられていたのです。

そして、彼の帽子は、どこへ行ったのか、なくなっていました。

その後、絵描きが、展覧会で一等をとったのは、言うまでもありません。

王さまは、門の絵を見ながらうれしそうです。

「まことに懐かしい。この門は、小さきころ、よく訪れた、わが弟の領地へ入るための門。わが弟には、王子がいたが、戦いで、生き別れてしまったのだ。この絵を描いた者をここへ。」

絵描きは宮殿に通され、王さまと向き合いました。

「そなたの絵が、このたびめでたく一等となった。しかし、わしは不思議でならぬ。なぜ、この門を知っているのだ。」

「わかりません。夜空を見上げていて、突然、思い浮かんだのです。どこかで見たような気はしましたが。」

「そなた、父の名は？」

「私には家族はありません。ただ、これを。」

絵描きは、小さいころから大切にしていた絵の道具箱から、筆を取りだしました。

「いまは使っていませんが、これは私の親が、私のために作ってくれたものらしいのです。私の住んでいたところは、いくさがあつて、それで皆、離れ離れになったそうです。」

「ふーむ。」

王さまがその筆を見ると、筆には、王さまの弟の紋章が刻まれていたのです。

さて、それからどうなったか？

今日も絵描きは、いつもと変わらぬ草原で、絵を描きつづけています。彼にとっては、王さまと一緒に都城で暮らすより、このほうが心地良いのでしょうか。

空がピンク色になり、宵の明星の出るのを待つとき、彼は、あの細い人たちの言った言葉を、一つひとつ思い出します。

そして、細い人たちの持っていった帽子のなかの、あの最後の星の美しさも、忘れてはならないと思うのです。

問一 —— 線①「絵描きは草の上に寝転んで、空を見、はたと思いつきました。」とありますが、「絵描き」は何をしようと思いついたのですか。解答らんの「と思いついた。」につながるように、文中の言葉を使って二十字以内で答えなさい。

問二 —— 線②「考えました」には、敬語が使われていません。王さまを敬う正しい表現に書きかえなさい。

問三 —— 線③「A」にあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア のろのろ      イ のこのこ
- ウ さっさ      エ くどくど

問四 —— 線④「やっぱりお金持ちしか、出せないのさ。」とありますが、どういうことを言っているのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 展覧会に出す絵を描くためには道具をそろえなければならず、お金がかかるということ。
- イ 展覧会に出品するためには、お城に何度も通って覚えてもらうことが重要だということ。
- ウ 展覧会への出品は、描いた絵ではなくお金を持っているかどうかで決まるということ。
- エ 王女さまが展覧会に反対なので、一人も出品できないようにじゃまをしているということ。

問五 —— 線④「声をひそめて話しました。」とありますが、人々はなぜ声をひそめたのだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 展覧会に対する悪口が、王女さまや大臣たちの耳に入ることをおそれたから。
- イ 王さまや王女さまに直接話を聞かれたら、その場でつかまるにちがいないから。
- ウ 大臣が王さまより権力を持っているので、大臣に聞かれたくないと思ったから。
- エ この国の人たちは、自由に自分の意見を言うことを禁止されているから。

問六 —— 線⑤「さんざんになじられ」とありますが、どのような意味ですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 敵として大いにくまれ      イ 行く手を完全にふさがれ
- ウ 悪い点をひどく責められ      エ 手玉にとってからかわれ

問七 —— 線⑥「ひとしきり彼は泣いていましたが、やがて顔をあげ、涙を拭きました。」とありますが、この時の絵描きの気持ちを説明したものととして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 展覧会に出そうとした絵も大切な絵の道具も踏み荒らされ、くやしい気持ちになったが、もっと素晴らしい絵を描いて見返してやりたいと思っている。

イ せっかく描いた絵を評価してもらえずに展覧会には出せなかったが、王さまに直接見てもらえればチャンスがあるかもしれないと前向きになっている。

ウ 自信があつた絵をめちやくちやにされ、涙を流したが、涙がキラキラ光ってきれいに見えたのではげまされたような気になっている。

エ 力をこめて描いた絵を踏みにじられて悲しいが、目に見えない力に守られていると信じて、自分が満足する絵を描くことが重要だと思ひ直している。

問八 —— 線⑦「□が抜けそうになりました」の□にあてはまる、身体の一部を表す言葉を答えなさい。

問九 —— 線⑧「焦げたにおいがします。」とありますが、「焦げたにおい」がするのは何が焦げているせいですか。文中からぬき出して答えなさい。

問十 —— 線⑨「皆、泣いています。とても細い人たちですが、よく見ると、薄いベールをまとい、まるで妖精のようです。」とありますが、なぜ「細い人たち」は泣いているのですか。解答らんの「から。」につながるように、会話中の言葉を使って十字以内で答えなさい。

問十一 —— 線⑩「厳かに答えました。」とありますが、「厳かに」とはどのような様子ですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 恐ろしさや寒さなどでぶるぶるふるえる様子。

イ 重々しく、改まった態度で近寄りが見たい様子。

ウ 痛ましく、見るにしのびないほどひどい様子。

エ よそよそしく距離をおいて人を見下した様子。

問十二 —— 線⑪「何とか助かる方法はないのですか？」という「絵描き」の問いかけに、「細い人たちが「助かる方法」としてあげたのはどのようなことですか。会話中の言葉を使って解答らんの「こと。」につながるように答えなさい。



問十三 —— 線⑫「あきらめちゃいけない。ちゃんと拾いましたよ。」について、次の1・2の問いに答えな  
なさい。

1「絵描き」は何を「ちゃんと拾」ったと言っているのですか。文中からぬき出して答えなさい。

2「絵描き」は「あきらめちゃいけない。」と言うことで何を伝えようとしているのですか。次のア  
～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア あきらめずにたくさん星を増やし、この世界を明かりで満たしてほしいということ。

イ 拾うことをあきらめなければ、この世界の星はけっしてなくならないということ。

ウ かんたんにあきらめていては、外の世界にぬけ出すことはできないということ。

エ 私が拾ったように、だれかが必ず助けてくれるからあきらめずに待つべきだということ。

問十四 —— 線⑬「外の世界の人は、皆そう言います。」とありますが、「そう」の指す内容をふくむ一文を文  
中からぬき出し、その初めの五字を答えなさい。

問十五 —— 線⑭「彼の帽子は、どこへ行ったのか、なくなっていました。」とありますが、彼の帽子がなく  
なっていたことよって、どのようなことを表していると読み取れますか。次の□にあてはまる言  
葉を十字以内で考えて答えなさい。

今まで起こったことが□こと。

問十六 —— 線⑮「筆には、王さまの弟の紋章が刻まれていたのです。」ということから、「絵描き」が王さま  
とどのような関係にあることがわかりますか。次の□にあてはまる言葉を十五字以内で考えて答え  
なさい。

絵描きが□こと。

問十七 この物語を通じて作者が伝えたいことを説明したものととして最も適当なものを、次のア～エの中から  
一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 妖精のような細い人たちを登場させることにより、この世の中には現在も不思議なことの起こる  
可能性が十分にあるのだということに気づいてほしいと伝えている。

イ 絵を描くことに自信を失った絵描きが、不思議な人々との出会いによって失った自信を取り戻す  
物語を通して、美しい心や夢を持ち続けてほしいということを伝えている。

ウ 美しい人々の心からとれる希望の粉は、以前はたくさんあったのに今は減ってしまっているとい  
う話から、現在の環境問題について真剣に考えてほしいと伝えている。

エ 自分をごまかし、正しい心を持たない人が増えていることに対して、神様が怒っていることを警  
告しながら、正直に生きることが何より大切なのだということを伝えている。

## 二 次の漢字に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 眞実をキユウメイする。
- ② すばらしい作品をシヨウサンする。
- ③ 電車のウンチンをはらう。
- ④ あきらめないことが合格のテツソクだ。
- ⑤ ピアノをチヨウリツしてもらう。

問二 次の①～⑤の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 事故を未然に防ぐ。
- ② 感傷的な気分ひたる。
- ③ 今回の計画は君に任せよう。
- ④ 綿密な計画を立てる。
- ⑤ 著名な作家の本を読む。

### 三 次の言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤のことわざの□にあてはまる漢字一字を、それぞれ答えなさい。

- ① □に腹は変えられぬ
- ② 雀<sup>すずめ</sup> □までおどり忘れず
- ③ 雨だれ □をうがつ
- ④ □の顔も三度まで
- ⑤ 船頭<sup>せんとう</sup>多くして船 □にのぼる

問二 次の①～③の言葉の類義語となる二字の熟語を、後の漢字を組み合わせそれぞれ作りなさい。

- ① 美点      ② 所得      ③ 簡単

長 不 快 入 要 所 易 収 容 支

問三 次の①・②の中にあるア～エの——線部の言葉の使い方として正しいものを、それぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- ① ア 卒業式が始まるので、私たちはえりを正した。  
イ ぐっすりねむれたので、すっかりえりを正した。  
ウ 洗たくに出すときは、えりを正すのがマナーだ。  
エ このクラスはにぎやかでえりを正すふんいきだ。
- ② ア どちらの意見も一理あり、たえず誤りとはいえない。  
イ たえず昔の出来事なので、もうよく覚えていない。  
ウ 楽団が演奏する美しいしらべが、たえず流れていた。  
エ 急いでほしいと言われたので、たえず仕事を始めた。